

遠藤周作の世界

沈黙以後

武田友寿著

沈黙以後

— 遠藤周作の世界 —

武田友寿著

「沈黙」以後—遠藤周作の世界

¥ 2200

---

著 者 武田友寿

発行所 女子パウロ会 代表者 井出昭子

〒107 東京都港区赤坂 8-12-42

☎(03)479-3941 振替 東京 4-101228

初版発行 1985年6月30日

印刷所 精興社

---

ISBN4-7896-0200-1 C0095 6100(日キ販)

# 目次

序章 ふたたび・遠藤周作の世界……………5

第一章 『沈黙』以後……………19

I 『沈黙』の波紋 21

II 〈母性〉の原像 42

III サンタ・マリア 69

IV 切支丹と聖書 86

第二章 怒りの神・慈愛の神……………103

I 聖書―「慰めの物語」 105

II 事実のイエス・真実のイエス 129

III 〈愛〉の人 163

IV 泥沼の歳月 182

第三章 復活の序章<sup>プロローグ</sup>……………205

## 第四章

### 新しき歌

.....  
303

I 聖書の謎<sup>エピソード</sup> 207

II 切支丹の泪 229

III 敗者の十字架 254

IV 長い夜の終わり 277

I 有馬の騎士 305

II 沈黙の信仰 327

III 愚者の肖像 352

IV 「愛」の殉教者たち 371

V 聖者のまほろば 391

## 終章

回帰の地平 .....  
407

I 神々と神と 409

II 鑑三・白鳥・周作 430

Ⅲ 新たな地平 460

あとがき 473

付 小説の分類・位置 476

作品の立体関係 477

序章

ふたたび・遠藤周作の世界……





私にふたたび遠藤周作論の筆を執らせるものは、『沈黙』以後十六年にわたる遠藤氏の豊かな創造世界に接してうけてきた感動である。私はそこに『神々と神と』から『沈黙』までの十九年間とはくらぶべくもない、重畳し、曲折に富んだ、刮目すべき遠藤文学の展開を見てきた。

『沈黙』以後の遠藤氏は、硬軟双面を合わせもつ作家として、広範多層の読者、支持者を獲得してきた。それには『沈黙』の評判ももちろんながら、いわゆる「ぐうたら」シリーズ、「狐狸庵」シリーズといった軽妙な文章をもって、心憎いばかりに人間の喜怒哀楽、日本人の心情を剔抉してみせた努力にある。そのことがまた逆に、『沈黙』の作家、遠藤周作の名を広め、高める効果も果たしている。

明治以後の日本の文学者の中で、何人かの作家が「国民的作家」と呼ばれている。夏目漱石、志賀直哉、吉川英治、川端康成、といった人びとにそういうジャーナリスティックな榮譽が与えられてきた。広く日本国民に愛好され、親しまれている作家という程度の意味だが、彼ら以後、そういう振幅の大きい人気作家はいなくなつた。

遠藤氏を「国民的作家」と呼ぶことに異論のあることは知っている。しかし純文学作家を表看板にする氏が、老若男女、社会各層の人びとから得ている敬愛と支持は、現代の作家としては珍しいことである。私はそんな氏をふと「国民的作家」と名づけてもいいのではないか、と思ったりする。加えて氏は、「キリスト教作家」「カトリック作家」と目されている人である。この「」だけでも特殊性は充分であり、それゆえに読者が特殊化しても当然なのに、遠藤氏はむしろ、それ故に、多くの日本人に親しまれ、信頼をうける結果を招いているのだ。このような作家の存在はたぶん、はなはだ稀有なことである。

このような遠藤氏をしかし私たちは、どれだけトータルに理解しているだろうか？ もちろんこのことは遠藤文学を愛読している一般読者にだけ向けられるべき問いではなく、私自身をも含めて、遠藤文学を論じ、書くことを通じて語ってきた批評家、研究者にも一様に向けられなければならないぬ間いなのである。早い話、『沈黙』以後十数年、実に多くの人が「遠藤周作論」を試みてきたのだが、それらの大部分は屋上屋を積むのに似て、その歳月にどれだけ深化があり、また論の展開があったか。私たちは自己反省をも含めて汗牛充棟の感を深めずにはいらぬのが現状であるといつてよい。それは、遠藤氏の創作活動を鳥瞰的に捉える視点を欠くことに原因しているか、あるいは、この作家の文業と軌跡を地道に追認していない、いわば近視眼的読書態度に由来する、とみても誤りではないだろう。これは問題作、話題作の多い作家であるだけに、私たちの陥りやすいワナである。

文学はもちろん、人それぞれの読み方、味わい方があっていいものである。したがって、遠藤文学はこう読まなければならないとか、この作品はあの作品とこうつながっているからこう味わわねばなら

ぬ、とかいったことは無用の指図といわねばならない。だが、私がいまここで問題にしているのは、そういう文学の読み方、味わい方ではない。遠藤文学を真にわかろうとする人、あるいはわかったと自認している人にとって、その「わかる」ということはどういうことなのか。そのことについての反省であり、自戒なのである。その場合の私たちの盲点がどこにあるのか。私は私なりの遠藤文学体験を通して、研究者としてまことに初歩的なステップについての省察を提言してみたいにすぎないのである。

以上のようなことを言えば、私はいやでも自分で指摘した欠落部を補綴ほてつしなければならぬ仕儀になる。これについて私に日ごろメモふうに作成して使っている二つの図表があるのだが、経済白書か統計文書に出てくるような図表をこの種の書物に掲げることにはふさわしくない（一度、『福音』としての文学』と題する論文で―清泉女子大学人文科学研究所「紀要」第6号||昭・59・6―この図表を発表したことがある）ので、図表を使わずに図表的説明を試みてみることにしよう。

まず「小説作品の分類・位置」図について。

これは遠藤氏の小説作品を第一群から第四群に分け、さらに純文学的作品をA類とB類に、軽小説をC類に分ける。つまり、『白い人』から『女の一生』までの小説を十二のグループに類別する。そして、それぞれのグループに主な作品名を書きこめば、つぎのようになる。

## A 類

## 〈第一群〉

『白い人』

『青い小さな葡萄』

## B 類

『黄色い人』

『海と毒薬』

『火山』

## C 類

## 〈第二群〉

『留学』

『哀歌』

『おバカさん』

『ヘチマくん』

『わたしが・棄てた・女』

## 〈第三群〉

『死海のほとり』

『沈黙』

『楽天大将』

『黄金の国』

『大変だァ』

『影法師』

『一、二、三』

『母なるもの』

『ピエロの歌』

『メナム河の日本人』

『砂の城』

## 〈第四群〉

『鉄の首枷』

『女の一生』

『銃と十字架』

## 『侍』

## 『王国への道』

以上の分類をまとめて、第一群、第二群を『沈黙』までの道程』とし、第三群、第四群を『沈黙』からの道程』と私はみるのだが、そうすると第一群は『沈黙』までの道程』の「前期」、第二群は「後期」と名づけることができ、同様に第三群は『沈黙』からの道程』「一期」、第四群は「二期」となる。

また、この四つの時期区分には、それぞれ創造的背景があつて、

第一群では「第一回留学体験」、

第二群では「第一期聖書研究」（『聖書のなかの女性たち』）、二年にわたる「大患」

第三群では「第二期聖書研究」（『イエスの生涯』）、「切支丹研究」

第四群では「第三期聖書研究」（『キリストの誕生』）、「切支丹研究」

を挙げるができる。

これが私の作成している「小説作品の分類・位置」図だが、ポイントはいうまでもなく『沈黙』の位置づけにある。すなわち私は、この作品を分水嶺にして、『沈黙』以前と以後に遠藤氏の文業を二分し、『沈黙』をむしろ、「以後」の文業の起点的作品とみていることである。ここにまず私の遠藤文学理解の視点がある。

しかし「小説作品の分類・位置」図はいわば平面的鳥瞰である。これでは作品相互の関係や立体構造はみえてこない。そこでもうひとつ、つぎに示すのが「作品の立体関係」図と私が名づけているものである。

#### ◇純文学A類について

『白い人』—『青い小さな葡萄』—『留学』—『死海のほとり』とつながっていて、〈西欧の告発〉(第一群)、〈西欧との対決〉(第二群)、〈西欧の変容〉(第三群)がその基調にある。

#### ◇純文学B類について

『黄色い人』—『海と毒薬』—『火山』—『哀歌』—『沈黙』—『影法師』—『母なるもの』—『鉄の首枷』—『銃と十字架』—『侍』と連続し、第一群—日本人の罪意識、第二群—背教性の苛責、第三群—ヘクリスト教の変容、第四群—信仰の意味の探求といった主題が鮮明にみられる。

#### ◇軽小説C類について

『おバカさん』—『ヘチマくん』—『わたしが・棄てた・女』—『楽天大将』『大変だア』『ピエロの歌』『砂の城』—『女の一生』と続き、第二群では〈弱者・凡庸性の発見〉、第三群では〈弱者・凡庸性の肯定〉、第四群では〈弱者・凡庸性の聖化〉といったプロセスがあらわれている。

ちなみに、この三つの系統に指摘しておいた、基調、主題、プロセスは第一群と第二群、第二群と

第三群、第三群と第四群とそれぞれに「変化」していることに気づくはずだが、その「変化」の内実に目を凝らせば、第一群では〈キリスト教への疑問〉であったものが、第二群では〈信仰の反省〉となり、第三群では〈信仰の批判〉、第四群では〈信仰の賦活〉と名づけうる事実があり、それらが創作の根源衝動となり、モチーフとなって前述の基調、主題、プロセスを染めていることがわかるのである。もちろん、その「変化」には変化をもたらした「体験」がある。これについては、さきに述べた各群の創造的背景を挙げればよいことになる。

さてそこで、各作品の類別の連続性が整理されたところで、総合的な立体関係を明示しておかなければならない。その場合、ここで重要な関係作用をもつのが『聖書のなかの女性たち』―『イエスの生涯』―『キリストの誕生』と深化・展開した三つの「聖書物語」である。つぎにわかりやすく三作品の関係図を記すことにしよう。

## 2

◇『聖書のなかの女性たち』

まずこれは『おバカさん』に作用し『わたしが・棄てた・女』につづき、『哀歌』に流れてゆく。(C類とB類の接合)。ちなみに『ヘチマくん』には「大患」体験がさらに加わり、『わたしが・棄てた・女』『哀歌』に投影されている。



## ◇『イエスの生涯』

発端は『沈黙』であり、小説に反映するのは『母なるもの』『死海のほとり』である。(ここで、A類とB類が重なり合うことになる。)

## ◇『キリストの誕生』

『母なるもの』—『鉄の首枷』の基調と、『死海のほとり』のモチーフが『キリストの誕生』で受け止められ、深化・展開される。そしてそれが『銃と十字架』に流れ、『侍』に結晶する。『女の一生』はその軽小説上の結晶と考えられる。

これで私の遠藤文学鳥瞰作業を終えたことになる。ここにいったいどんな遠藤文学像が泛んでくるか。

遠藤氏の作家歴も『女の一生』までを数えれば二十八年、『神々と神と』を起点にした文学歴をみれば三十五年になる。同世代作家Ⅱ第三の新人群の作家としてはいちばん長いかもしれないし、第一次戦後派の旗手でキリスト者作家でもあった椎名麟三の出発とほぼ時を同じくしている。しかし、その椎名も世を去ってすでに十年になる。キリスト者作家で氏の文学歴と対等に語りうるのは島尾敏雄氏だが、島尾氏のキリスト教入信は昭和三十三年であるから、キリスト者作家の足跡としては遠藤氏よりも十年の遅れをとっていることになる。

私は、遠藤氏を優越視して強調したいがためにこのような文学歴の長短を問題にしているのではな